

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 17 日現在

機関番号：13801
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2012～2014
課題番号：24520743
研究課題名(和文)近代日本における「他者」認識としての中国観

研究課題名(英文)Modern Japanese view of China as others

研究代表者

黒川 みどり (Kurokawa, Midori)

静岡大学・教育学部・教授

研究者番号：60283321

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、明治後半から昭和初期にかけての知識人を対象に、近代日本の中国認識を明らかにした。内藤湖南を中心にすえ、吉野作造を比較の軸におきながら、中国ナショナリズムの理解、日本と中国の「文化」理解を分析し、中国 アジアという「他者」への向き合い方のありようを追究した。近代日本は、アジアに対して「他者」感覚を欠落させがちなまま歴史を積み重ねてきたことは否めず、それがゆえに、東亜協同体論、大東亜共栄圏が唱えられ侵略が正当化されていくことにもつながった。

研究成果の概要(英文)： This study figured out how Japanese people recognized China, focusing on intellectuals between the late period of Meiji and the first period of Showa. In particular, we mainly focused on Konan Naito and compared him to Sakuzo Yoshino. By doing so, we analyzed how the Japanese people recognized the nationalism and the culture of China in order to investigate how they faced with China as an "outsider". We revealed that modern Japanese people lucked to recognize that China is an "outsider", and therefore that led those people to justify to invade China relying on "Toa-Kyodotai-ron" and "Daitoa-Kyoeiken"

研究分野：日本近現代思想史

キーワード：中国 他者 内藤湖南 ナショナリズム 近代日本 アジア

1. 研究開始当初の背景

本研究は、明治後半から昭和初期にかけて活躍した知識人を対象に据えて、近代日本の中国認識を明らかにすべく出発した。内藤湖南と吉野作造をはじめとして中国ナショナリズム理解、日本並びに中国の「文化」理解を分析し、中国 アジアという「他者」への向き合い方のありようを追究する。近代日本社会において「自己」と「他者」を分かち権力支配を見据えつつ「他者」をつくり出してきたプロセスに注目しながら、近代日本社会が「他者」にどのように向き合ってきたのかを明らかにし、ひいてはそのような「他者」を生み出してきた日本社会のありようそのものを問うことをめざした。

なかんずく内藤湖南については、中国史研究においては現在も時代区分論など内藤が築いた中国認識の枠組に依拠して研究を行っている側面が強く、他方近代日本思想史も、内藤の中国認識には中国に対するナショナリズム理解などの点で多分に問題があることを承知しながらも、内藤を正面から取り上げることはなかった。したがって本研究は、従来の日本の中国史研究のありようにも問題を提起し、そうした学知のあり方の再検討をめざした。

本研究代表者は、自らの研究の出発点でもあった被差別部落問題に軸足を置きながら、部落史に人種主義という視角を導入することで、マイノリティの比較史研究として枠組みを広げてきた。そうして近年は、同様の問題意識をもつ研究者との共同研究の成果を黒川編『近代日本の 他者 と向き合う』(解放出版社、2010年)として世に問うなかで、「他者」認識に関する研究史を総括し、かつ多様な観点からの「他者」認識についての比較検討を行い、そのなかですでに研究分担者が中国認識を対象にした研究成果を発表して本研究につながる第一歩を踏み出してきた(與那覇潤「中国化の季節」、山田智「近代日本からの中国への眼差し 内藤湖南の時代区分論を手がかりとして」)。また、研究分担者小嶋茂稔は『漢代国家統治の構造と展開』(汲古書院、2009年)などを世に問い、それぞれの観点から本研究に関わる蓄積を積んできた。

いうまでもなく日本は中国をはじめとするアジアの一員でもあり、またそれら周辺諸国と歴史的にも深いつながりを有してきたが、にもかかわらず、否そうであるがゆえに却ってそれらに対して「他者」感覚を持ちえず、日本との間に種々の歪みを生じさせ、かつて竹内好が指摘したようにアジア認識はまさに近代日本にとってのアポリアともなってきた。近年、ポストコロニアリズムの観点からの研究成果が数多く出され、そこでは「日本人」と「外地」、「日本人」とその他の人々、といった境界も審問に付され、国民国家の枠組みにとどまって日本近代史に向き合うことの可否が問われてきた。それらの成

果は、中核 周辺の関係に置かれてきたアジアとの関係の再検討を迫り、また「他者」認識という観点からも大きく寄与してきたことはいまでもなく、本研究もそれらに大いに学ぶものである。しかしながら、方法論の斬新さを打ち出すことに傾斜しがちで、「脱亜論」から戦中 戦後のアジア認識を切り結ぶ内在的な研究に十分な成果を上げてきたとは必ずしもいえず、かたや、日本の侵略主義の原点を福沢諭吉の「脱亜論」に求めてそれを断罪する研究も横行しており、そうしたアプローチのみではアポリアを克服するという課題が横たわっている。

2. 研究の目的

本研究ではまず、従来の研究では同列に論じられることがほとんどなくしかも中国ナショナリズムに対する理解を全く異にする内藤湖南と吉野作造の二人を取り上げ、両者の中国観を軸に、他の知識人や国家(陸軍・外務省・政党)の対中国政策と比較しながら近代日本の中国観を検討する。特に辛亥革命の頃から在野の知識人たちのアジア観が国家の政策とは独自の様相を呈するようになることから、当該時期を分析することは本研究において重要な意味をもつ。

時代区分論をはじめ内藤の研究は今日なお中国史研究に大きな影響力を持っているが、日本近代思想史の側からの本格的研究はなされていない。吉野も、彼の中国・朝鮮論研究は進んだが、いまだ他の知識人との対比におけるアジア認識の相対的評価は十分には行われてこなかった。この点を日本近代史研究者と中国史研究者の共同プロジェクトとして行うことは本研究の特色であり、中国史研究の今日的成果に照らし当該時期の知識人の言説を相対化することによって、研究史と思想史の接合を行う。

三宅雪嶺らの『日本人』グループから出発した内藤が、中国革命の進行と日本の中国侵略の推進を目の当たりにしながらどのように中国認識、ならびに東洋史・中国史研究を変容させていったのかを明らかにする。中国革命運動の進展とともに中国ナショナリズムへの共感を強めていった吉野を、日本の「文化的使命」を強調することにより日本の侵略を追認・肯定することになった内藤と比較する。その際には、両者の中国認識のみならず各々の学問・思想の全体系を理解した上で思想内在的に考察する。

3. 研究の方法

(1)本研究メンバー全員(研究協力者を含む 6名)が毎月研究会を開催し、内藤湖南・吉野作造等近代日本の中国観を読み解くためのテキストを講読し議論を重ねて論点を抽出していく。

(2)内藤湖南・吉野作造に関する史資料、関係文献の悉皆調査、内藤・吉野中国観を形成した中国東北地方、並び到北京の現地調査を

行う。

(3)国内外の関連する外部の研究者を招き、公開研究会を開催して、本研究で積み重ねてきた議論を、他の知識人との比較も含めて多面的な角度から問い返す。社会思想史学会等で中間報告を行う。

(4)内藤湖南と吉野作族の比較研究を行った論集を刊行する。

4. 研究成果

本研究の成果をまとめた論文集、山田智・黒川みどり編『内藤湖南とアジア認識 日本近代思想史からみる』(勉誠出版、2013年)の成果を中心に以下に記す。

黒川みどり「文明中心移動説の形成」

内藤の中国認識の根幹がいつどのように形成され、それがいかに変化してゆくのかを、政教社の三宅雪嶺らを参照軸としながら、思想形成に遡り考察したものである。

まず内藤の思想形成の初期におけるキリスト教批判と藩閥批判に着目し、特に後者が英雄待望論に留まり、根源的な政府批判になりえないことを指摘する。またこのような内藤の、維新の敗残者としての「第二維新」待望論がリベラリズムと結合しえないこと、また弱肉強食として社会進化論を理解したことなどが、積極的な殖民論へつながったとする。さらに内藤が同時代の植村正久や内村鑑三らと相違して普遍主義的志向を欠いたことが、中国のナショナリズムへの無理解へつながったとする。やがて思想的逼塞状態にあった内藤は、日清戦争を契機として、国家の問題を文明に還元することでその対外膨張論を文明中心移動説として完成させた。日清戦争に勝利し、日本の東アジアにおける優勢が確定した時点で、東洋のなかで指導的地位にある日本の使命を「天命」と説くこの文明中心移動説は、やがて「文明」を「文化」に変えて日本の支配を隠蔽する学説として構築されたとする。

(1) 田澤晴子(研究協力者)「内藤湖南における近代と政治」

「文化中心移動説」にいたるまでの内藤の「近代」論には、西洋的価値観に基づく矛盾する二つの側面があることを指摘する。これを具体的には北清事変期・辛亥革命期・第一次世界大戦期・満州事変にかけての四期に分けて検討し、初期の対外的な主権国家の確立、内政における「代議制」の確立という政治上の近代化に国家「成熟」の基準が、第一次世界大戦期と満州事変にかけての時期に、人民と国家とを分けることで日本の中国への積極政策を主張し、日本人による改革の実施へとその主張を転換したことを指摘し、その過程で文化中心移動説や宋代近世説が生み出されたとする。

(2) 山田智「内藤湖南の朝鮮理解と東洋史」

内藤の朝鮮観が中国観との対比の中で

のように展開してきたのかを検討し、中国のほかには日本のみに可能性を見出す「東洋」観によって、朝鮮半島が実態以上に低く位置づけられる過程を解き明かした。その過程で、内藤全集に未集の論考を中心に取り上げるが、このことは内藤全集の性格自体が、内藤の思想形成をたどるためのものではなく、内藤の「支那学」における業績を俯瞰するためだけのものであることを物語っており、このあり方こそが、内藤の受容のありかたの象徴であるとする。

(3) 與那覇潤「『新支那論』ノート」

内藤を「史論家」と位置づけた上で、二〇世紀初頭に示されたその中国観が、経済大国として台頭した二十一世紀の中国にたいする現代の評価の先駆けとなったものとする。従来『支那論』に比べて低い評価を受けてきた『新支那論』に示された「停滞」する中国像は、西欧近代の未達成を意味するものではなく、むしろ西欧やその後を追った日本の未来の姿であったとする。このような内藤の「直感」による中国観を伝統的歴史学の枠組みから離れた地点にたつことによってさまざまな可能性を引き出し、最後に、このような可能性を有する中国観を示していた内藤が、なぜその時評を誤ったのか、またそこから何を学ぶべきかを指摘する。

(4) 姜海守「朝鮮を抜きにして「支那(学)は語れるか」

日中両国の研究者たちの独占物となってきた湖南論を、韓国という「外部」から特に朝鮮を巡る言説を詳細に分析するものである。内藤の日本文化史論では朝鮮半島の中国文化の日本への流入の経由地としての価値すらほとんど評価されない点を確認しながら、文化中心移動説的な日本文化の東洋への波及という思想が、竹内好の言う「中国に対する日本人の侮蔑感を除くため」の日本文化の独立とは正反であることを指摘し、同時に朝鮮の歴史的他者性を認めないなど、きわめて政治的な言説となっていると、朝鮮を排除した形で形成された内藤の「支那学」を無批判に継承することの危険性を指摘する。

また姜は、『道義』から『広義王道』へ津田左右吉と橋樸の『王道』言説(国民大学校日本学研究所編『日本空間』第13号、2013年6月)において、次のことを明らかにした。

主に1930、40年代の昭和日本において「支那」ないし「満州国」をめぐる、それぞれ異なる「道義」もしくは「王道」言説を語った津田左右吉と橋樸の所説を考察した。津田の場合には「道義」的観点から「支那人」の「道義の無さ」とそれに繋がる「公共生活の観念の無さ」を指摘する傍ら、「支那」の「王道(論)」を他者的な存在として排除する。それに対して、橋樸の場合には「王道(論)」を「支那」および「満州」のような他者と帝国日本とをつなぐものとして積極的に取り入れようとし、

それが「広義(の)王道」論として現れているのである。

(5) 小嶋茂稔「近代日本における「東洋史」の形成と湖南の中国史」/「戦前期東洋史学における湖南学説の受容をめぐって」

内藤の中国史認識は、「唐宋変革論」や「宋代以降中国近世説」に代表されるが、それらの見解は、今日においても、継承可能な観点を含む優れた歴史認識として受け容れられている側面がある。それに対して、内藤の中国認識が、日本の歴史学界において「支那史」から「東洋史」へとその認識枠組みが大きく変容する中で形成されたことに着目し、同時代の他の東洋史学者(那珂通世・市村瓊次郎・白鳥庫吉・桑原隲藏)の中国史認識と比較しながら、「支那」を語ることを得意とした内藤が、「東洋史」の枠組みの中で自己の中国史認識をどのように語っていたのかを論じた。

続いて、内藤の時代区分論に着目し、当時の東洋史学界においてそれがどのように受容されていたかを、当時刊行された学界回顧等を分析することを通して、明らかにした。その結果、内藤の学統に連なる研究者を別にすれば、特に東京で活躍した昭和戦前期の若い東洋史研究者には、一定程度の影響はあったものの、内藤の見解は必ずしも全面的に受容されたとは言えないことが明らかとなった。内藤の学説は、戦後の中国史研究の深まりの過程で、広く受容されるようになったと考えるべきである。

さらに、『新制東洋史』に見る内藤湖南の中国史認識をめぐって-戦前期「東洋史」教育にみる「研究」と「教育」の架橋の一事例- (『史海』第62号、2015年)において、以下の成果を世に問うた。内藤湖南は、その受業生であった丹羽正義の助力を受けつつ、1931年に、当時の中学校用の東洋史教科書である『新制東洋史』を刊行した。本論文は、当時の教育行政の枠組みや、当時のより有力な東洋史教科書である桑原隲藏『中学東洋史』の叙述内容との比較などを通じて、『新制東洋史』の特質を浮き彫りにしつつ、教育を介して内藤の中国史認識が当時の日本社会に受容された可能性を論じたものである。その結果、確かに『新制東洋史』の叙述内容は、当時の教育行政の枠組みに依拠して作成される一方、ほぼ全面的に内藤の中国史認識に貫かれたものであった。それだけに当時の教育現場でその意図が十分理解されたかどうかは疑問なしとせざるを得ないが、同時に、当時の一般的認識として、「中等教育」=「研究」の認識が存在していたことも明らかであったのであり、内藤の教科書執筆の背景には当時のそうした認識の存在も存在した可能性を指摘した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 6 件)

小嶋茂稔 『新制東洋史』に見る内藤湖南の中国史認識をめぐって-戦前期「東洋史」教育にみる「研究」と「教育」の架橋の一事例-、査読無、『史海』62、2015、1-13

小嶋茂稔 那珂通世の「東洋史」教育構想-旧制中学校における「東洋史」教育教科内容の成立過程 査読無 『史海』61、2014、23-35
與那覇潤 ふたつの『中国化論』 江藤淳と山本七平、査読無、『アステイオン』81号、2014、16-29

黒川みどり 日本における部落問題 近現代の歴史をたどりながら、東京大学大学院総合文化研究科附属地域グローバル地域研究機構ドイツ・ヨーロッパセンター『ヨーロッパ研究』、査読無、Vol.14、2014、37-41
姜海守 『道義』から『広義王道』へ 津田左右吉と橋樑の『王道』言説、国民大学校日本学研究所編『日本空間』査読有、13、2013、132-167 (韓国語)

黒川みどり【歴史のひろば】「大阪人権博物館と橋下市政」、査読有、『歴史評論』第754号、2013、73-83

〔学会発表〕(計 7 件)

與那覇潤 日本イギリス児童文学学会・日本児童文学学会両中部支部共催シンポジウム「新しきを温ねて古きを知る：物語の共有を巡って」「歴史教材としての小津安二郎『帝国の残影』再訪」、名古屋大学(愛知県・名古屋市)、2014年9月28日

小嶋茂稔 東京学芸大学史学会2014年度大会自由論題報告「『新制東洋史』に見る内藤湖南の中国史認識をめぐって-戦前期「東洋史」教育にみる「研究」と「教育」の架橋の一事例-」、東京学芸大学(東京都小金井市)、2014年6月22日

與那覇潤 日本文化人類学会50周年記念公開シンポジウム「人類学の明日、人類学の明日：『いま・ここ』から考える」「『日本人らしさ』の現在 史論家の目で見たい隣の人類学」、東京大学駒場キャンパス(東京都・世田谷区)、2014年5月11日。

黒川みどり 基調講演「日本における部落問題 近現代の歴史をたどりながら」、東京大学大学院総合文化研究科附属地域グローバル地域研究機構ドイツ・ヨーロッパセンター(東京都渋谷区) 2014年3月14日

黒川みどり 台湾中央研究院台湾史研究所 ワークショップ「植民地台湾における社会的排除と植民地権力」「日本近代部落史研究と被差別民」 2013年10月18日

姜海守「明治神宮の『道義』概念」(日本宗教学会第72回学術大会第1部会「宗教の公共性とは何か 国家神道から考える」(東

京都]国学院大学) 2013 年 9 月 7 日、姜海守
「明治神宮と道義」(シンポジウム「宗教と
公共性 神道と宗教復興から」([京都]国際
日本文化研究センター) 2013 年 7 月 22 日
黒川みどり 東京歴史科学研究会歴史科
学講座講演「戦後 / 差別の諸相」 早稲田大
学 15 号館 02 教室(東京都新宿区) 2013 年
2 月 2 日

〔図書〕(計 11 件)

黒川みどり・藤野豊、岩波書店、差別の日本
近現代史、2015、280

黒川みどり、ほか、岩波書店、岩波講座日本
歴史 近代 3、2014、「改造」の時代」175
~ 208

赤澤史朗・北河賢三・黒川みどり編、影書
房、戦後知識人と民衆観、2014、373

樋口映美・貴堂善之・日暮美奈子・黒川み
どり、ほか。彩流社、近代規範の社会史
都市・身体・国家、2013、300 黒川執筆
分... 「市民」になる / 「市民」をつくる」、
pp.275-296

山田智・黒川みどり・田澤晴子・小嶋茂稔・
与那覇潤・姜海守・松本三之介、勉誠出版、
内藤湖南とアジア認識 日本近代思想史か
らみる、2013、307

安田常雄、黒川みどり、ほか、岩波書店、
シリーズ戦後日本社会の歴史 4 社会の境
界を生きる人びと 戦後日本の縁、2013、黒
川担当箇所「差別の諸相」158-186

東島誠・与那覇潤、太田出版、日本の起源
2013、360

与那覇潤、新潮社、史論の復権 与那覇
潤対論集、2013、23

与那覇潤、集英社インターナショナル、日
本人はなぜ存在するか、2013、189

苅部直、与那覇潤、ほか、ペリかん社、日
本思想史講座 4 近代、2013、(221-256 を執
筆)

池田信夫・与那覇潤、PHP 研究所、「日本
史」の終わり 変わる世界、変わらない日
本人、2012、315

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

取得状況(計 0 件)

〔その他〕

ホームページ等

なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

黒川 みどり (KUROKAWA, Midori)

静岡大学・教育学部・教授

研究者番号：60283321

(2) 研究分担者

小嶋 茂稔 (KOZIMA, Shigetoshi)

東京学芸大学・教育学部・准教授

研究者番号：20312720

姜 海守 (KANG, Haesoo)

国際基督教大学・付属研究所・研究員

研究者番号：60593928

山田 智 (YAMADA, Satoshi)

静岡大学・教育学部・准教授

研究者番号：90625211

与那覇 潤 (YONAHA, Jun)

愛知県立大学・日本文化学部・准教授

研究者番号：2390121427

(3) 連携研究者

なし